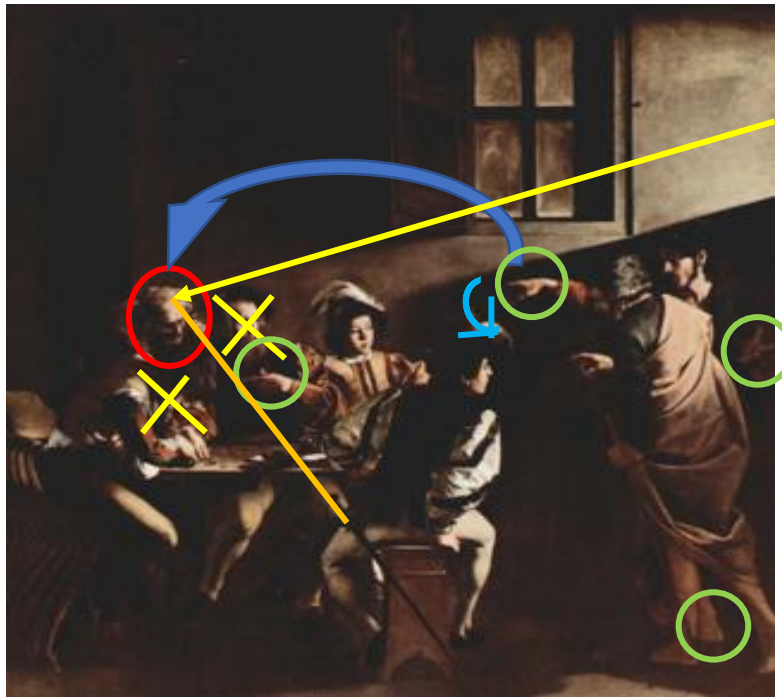


## 60 呼ばれたのは眼鏡の収税人

### 【聖マタイの召命】

真鍋友範

2024



《聖マタイの召命》1600 カラヴァッジョ

#### 1 【絵痴】：誤謬解説派

カラヴァッジョが描いた《聖マタイの召命》について、【イエスに呼ばれた人物を誤解している人】は、日本人も含め世界中に多数存在する。

音楽の世界だと、【音痴】と呼ばれる一定数のグループが存在する。一方、絵画の世界には【絵痴】と呼ばれるグループは確実に存在する。

主観であるが、【絵痴】の方は、【音痴】の方の人数よりも、はるかに大勢存

在する上に、この事実への本人自身の自覚が全くない。自覚がないから恥じることもないのだ。

小生【絵痴】ではないとの小さい自信はあるが、それはここに証明する必要があるだろう。

小生は、10年以上前、この『聖マタイはどこにいるのか』、といった西洋美術史界の伝統的な謎に対し、その筋の解説書が、【誰が呼び出されたのか、未だ未解決な謎のままであると、堂々主張される状態】を見て以来、やはり【絵痴】の人たちの存在への疑うことのない確信を持つに至った。

特に、現代でも大多数存在する《誤謬解説派》とは、【質問する中央の髭男】との解説か、【俯いてイエスに気づいていない若い収税人】との解説、いずれかの支持者だ。

過去の誤った西洋美術史の学説を、盲目的に受け入れ、踏襲することを止めて、しっかり自身の目で細部まで観察し、自身の頭で考えてみれば、真実は容易に見えてくるのだ。

はっきりと言おう。【中央のヒゲの男や、俯いた若い収税人は、ともにイエスに呼ばれた人物ではない。】

何故か。その答えは、カラヴァッジョの描いた身体表現をしっかり読み込めば、合理的に示され、明確だからだ。

《誤謬解説派》の《聖マタイの召命》へのご解説には共通する特徴がある。

それは、カラヴァッジョの描いた【登場人物の身体表現の細部を無視するか、意図的に排除する】という傾向だ。科学的・合理的視点が存在しない。

その結果、《誤謬解説派》は一部分についての身体表現を主観的に説明するが、合理的な全体説明は一切スルーしている。

【カラヴァッジョは、必要なメッセージを写實的、説明的にすべてを描き、無駄なものは極力描いていない画家だ。つまり、描いている要素については、しっかり見る側が全てに目を配る必要がある。】

聖マタイの召命は、その極端な例の見本となる秀作なのだ。

描かれている全体の表現を見ようとしない《誤謬解説派》の姿勢は、この作品を描いた本人である画家カラヴァッジョに対して失礼極まりない姿勢なのだ。

## 2 《誤謬解説派》への12件の疑問・質問

ここで《誤謬解説派》の擁護者・追隨者に対し12件の質問を投げかけたい。

- 1) 何故髭男の左手親指は立っているのか。その理由とは。
- 2) 髭男の左手人差し指の方向は、実際は隣のメガネの男に向いているとカラヴァッジョは明確に描いているのに、指の方向は【若い男に向いているように見える】、と事実を捻じ曲げるのか。透視図法を知らない素人だからなのか。
- 3) 何故イエスの左手の平は開かれたのか。その理由とは。
- 4) 何故イエスは右足を一步左側に踏み出したのか。その理由とは。
- 5) 何故イエスは指さしていると主張しながら、イエスの右手の手首より先には力を込めていないのか。
- 6) 何故、指先は曲がっているのか。【指差すとき、指を力なく曲げる人は世界中どこを探しても存在しない。】その理由とは。
- 7) そもそも、イエスは、マタイを呼び出すだけの場面で、指差すだけですみ。そのような場面で、何故このような複雑なポーズをとる必要があったのか。その理由とは。
- 8) 眼鏡の収税人の額に、光点が描かれているが、これは何か。
- 9) 何故、座っていない人物は、必ず立っている人物に分類できると断言できるのか。机に寄りかかった姿勢の人物（眼鏡の収税人のような）を見た経験はあるか。
- 10) 眼鏡の収税人は、座っていないが、立ってもいないという事実が無視されている。何故か。
- 11) 背を向けた若い納税者の剣の軸線は、何故【眼鏡の額の点光】に向かっているのか。
- 12) 《誤謬解説派》は、絵画を瞬間的な状態として説明する傾向があるが、カラヴァッジョの描いたストーリーを、実際に描かれている登場人物の身体動作の発生順に従い、具体的に解説しようとする。何故か。

これら12件の疑問・質問に対して、小生は、納得できる解説を、カラヴァッジョ解説書において一度も見た覚えが無い。

何故なら、《誤謬解説派》は、これらをほぼ完全に無視しているからだ。更に、画面の隅に描かれた内容など、習慣的あるいは意図的に見逃しているのだ。

もちろん、これらの理由について、小生は明快に答えることが可能だ。

\*《眼鏡の聖マタイ・ネット上の論文2013》で明らかにしているので、興味ある方は、そちらを参照いただきたい。

---

### 3 恥を知るべし

ここで私が改めて主張しておきたい点は、小生が主張する【聖マタイの人物特定に関する究極的な解説】を、無視・排除しながら、一方で【誤謬解説】を平然と社会に広め続け、社会的体面を保とうとする《誤謬解説派》の姿勢だろう。

【カラヴァッジョについて小生の主張する解説を誤りと感じるなら、堂々と異説の存在を認め、紙面やネット上で取り上げて論破すれば良いだけではないか。】

まるで、【道場破りと勝負することを拒む江戸時代の道場主】のような態度ではないか。

カラヴァッジョが、細部に至るまで克明に写実表現しているのに、カラヴァッジョの描いた内容を正確に読み取らず、誤った解説を社会に広め続ける無責任な《誤謬解説派》は、カラヴァッジョに対して、その行動を恥じ入るべきではないか。

【言論の自由】があるので、各々主張は自由である、という立場なのかも知れないが、【絵画内容の真実を突き止めようとする最低限の西洋美術史学者としての矜持は持つべき】ではないか。

カラヴァッジョも、墓の中では、【自身の作品への誤った解釈】を、さぞ嘆いているに違いない。

\* 《誤謬解説派》イタリア本国の学者に多い【髭の男が聖マタイ】と信じる美術史専門家、また、【俯いた若い収税人を聖マタイと信じる】ドイツ学派の美術史専門家、およびそれら誤謬解説の追随者・信奉者の総称。

\* 小生はカトリック信者ではないが、カトリック信者の多いイタリア人が、究極の真実を今も知らないならば、それは大問題ではないか。カラヴァッジョを生んだ偉大なバロック絵画発祥国の国民として、イタリア人として恥ずかしくないのだろうか。